

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：32418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520995

研究課題名(和文) 東アフリカ多言語併用社会に関する文化人類学的研究：タイタ語の世代間継承を中心に

研究課題名(英文) Cultural anthropological study on multilingual society in East Africa: focusing on intergenerational language transmission of the Taita

研究代表者

坂本 邦彦 (SAKAMOTO, KUNIHICO)

尚美学園大学・総合政策学部・教授

研究者番号：20215643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：東アフリカのタイタ人の言語世界を対象として、タイタ語とスワヒリ語をはじめとする周辺語が言語の世代間継承に及ぼす影響を明らかにするとともに、危機言語研究への応用可能性を考察することが本研究の目的である。収録言語データ2000語を基礎資料とし、タイタ語の変化に関する認識をもとに分類をおこない、最終的に世代間継承の実際を3系統にまとめた。特に、祖父母の世代でしか使われていない語彙が、どのような表現に置き換わっていくかというタイタ語内部での文化変化を中心に分析した。これは、民族語に対する維持のための活動とともに、危機言語研究に対しても新たな視点を与えてくれると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The linguistic diversity is an inescapable fact in most African countries. In multilingual society, as for the pertaining to the choice of language, it is necessary to examine from a cultural viewpoint as well as the state on language. This study aims to analyze the intergenerational language transmission of the Taita in East Africa and discuss the applicability of the results on language endangerment study. I classified the Taita vocabularies into three categories referencing to UNESCO's study: the Taita which is based in Swahili, the original Taita which is used in all domains and by all ages, the endangerment Taita which is used in limited social domains and by the grandparental generation. Considered activity to maintain Taita ethnic language gives new perspectives for the language endangerment study, I suppose.

研究分野：社会人類学

キーワード：タイタ語 言語の世代間継承 ケニア 東アフリカ

1. 研究開始当初の背景

タイタ語に関する初期の研究としては、1890年代に英国聖公会宣教協会の派遣によるアルフレッド・レイがまとめたものが残っている (Wray, J.A. *An Elementary Introduction to the Taita Language*. Society for Promoting Christian Knowledge. London. 1894.)。これは、アフリカの個別言語の記述としては完成度の高いものであるが、ここで取り上げられているのはおもにサガラ方言であり、タイタ人の多くが使っているダヴィダ語ではなかった。タイタ語は、広域で通用するダヴィダ語のほかにサガラ方言とカシガウ方言があるが、タイタ語の標準形といえるダヴィダ語に関するまとまった研究はこれまでおこなわれてこなかった。筆者は、レイの著書をタイタ人の調査協力者と共に読み合わせをおこなったところ、1世紀が経過していることと、サガラ方言の記述であることから、現在使われているダヴィダ語とは多くの点で異なることが明らかになった。その後、20世紀初頭にテイト Tate, H.R.による基礎語彙の収集がおこなわれたが、それ以降は、国外の研究においては、プリンズ Prins, J.、ハリス Harris, G.、ムカンギ Mkangi、ムワンドエ Mwandoe 等によりタイタの文化社会に関する研究がおこなわれてきた。

また、国内の研究においては、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を中心としておこなわれてきたアジア・アフリカの諸言語に関する研究と並行して、平成12年度に同研究所編『アジア・アフリカ言語調査票』にもとづいて筆者が採録した語をまとめて基礎語彙集として作成したものを公表した。平成13年度～15年度科学研究費補助金基盤研究(C)『文化人類学的視点にもとづくタイタ語辞典編纂に関する研究』において、タイタ語の語彙を中心とする研究をおこなった。平成16年度～18年度科学研究費補助

金基盤研究(C)『タイタ語の語彙と文法構造に関する文化人類学的研究』において、これまでのタイタ社会に関する文化人類学的研究をさらに深めていくために、文法構造に関する研究をおこなった。さらに平成19年度～21年度科学研究費補助金基盤研究(C)『タイタ語のコーパスに関する文化人類学的研究』において、これまでの研究を発話記録の形で収録した。

『エスノローグ第18版』(Gordon, R.G., *Ethnologue: languages of the world*. Dallas. 2015.)によると、現在、世界には7,102の言語があるとされる。多くの言語の中からただ1つの言語を生涯使い続ける人もいれば、複数の言語を使い分けながら日常生活をおくる人もいる。人間を取り巻く言語環境は、地域、時代によりさまざまな様相を呈してきたが、とくに多言語併用社会においては、どの言語がどのような状況で選択されるかはその文化のみならず、隣接社会との関係を理解する上で重要な視点を提供してきた。

これまで、ケニアの山地農耕民タイタ人の世界に関する文化人類学的研究をおこなってきたが、特にここ10年ほどは、タイタ語の語彙、文法などコーパスに関する研究を中心に進めてきた。基礎語彙の調査をしていた時、インフォーマントの若者は、語彙の意味に関して、しばしば「近所の老人に聞いてくる」と言って出かけていくことがあった。また、文法に関する調査をしていたとき、長老格のインフォーマントは、たまたま訪ねてきた若者に、「こんなタイタ語を知っているか」と尋ねると、彼らは初めて聞くという反応をしたことがしばしばあった。文化は継承されるとともに、さまざまな要因により変化していく。タイタ人は、タイタ語、スワヒリ語、英語の3言語併用の多言語社会に生きているが、彼らがどの言語をどの場面で使うかは、世代により異なることが予想される。また、

タイタ語の語彙のうち、どのような語彙が継承され、どのような語彙が言語表現の手段として使用されなくなっているのか、この点は、彼らがタイタという文化をどのようにとらえているかを文化の内側から語っている面であるといえる。

本研究では、このような視点から、これまでおこなってきたタイタ語の語彙、文法などコーパスに関する研究を継承しつつ、現実世界におけるタイタ語の変化を世代間継承の実態という点から明らかにしようとしたものである。これは、現在、各方面で行われている危機言語の研究方法としても有効であると考えられる。

2. 研究の目的

東アフリカのタイタ人の世界に関する文化人類学的研究の一環として、タイタ語が異なる世代間にどのように継承されているか、その実態を明らかにすることを通して多言語併用社会における文化変化の研究手法に新たな視点を導入するとともに、現在、世界のさまざまな地域でおこなわれている存続の危機に直面している言語の記録、分析に関わる研究にその手法を応用することができるようにすることが本研究の目的である。これは、タイタ語のコーパスに関する研究の次の段階として、文化変化に関わる動的側面を研究対象としたものである。

研究の目的は、伝統語彙の世代間継承の実態を明らかにすることにあるが、同様の視点でウェールズ語を研究したジョーンズ Jones は、世代を3つに分けて語彙の衰退を研究し、特定の意味領域において語彙知識の低下がみられることを指摘している (Jones, Ann E. *Lexical erosion in the villages of Clunderwen, Efailwen and Llandysilio. Cardiff Working Papers in Welsh Linguistics* 4. 1985.)。本研究では、年齢と地域の多様性を確保しながら進めていくとともに、これまでの研究で入手した語

彙に関する基礎データをもとに、意味領域ごとに語群の整理を行い、タイタ語の世代間継承の特徴を研究していくこととした。

3. 研究の方法

これまでの研究から、挨拶や呼びかけに使用する人称代名詞などは、世代を越えて広くタイタ語が使用されていることが分かっている。言語の継承には個人差が大きいと考えられるが、定量的な統計分析によらずに考察を進めるために、調査対象者は系譜関係で辿ることができる一群の集団とし、そのライフヒストリーに照らして継承の実態を明らかにしていく手法をとった。そこには、タイタ語の研究として一般化できるものとそうでないものが出てくるが、文化変化を言語を介してとらえる試みとしては、まず、個別の事例を蓄積していくことが必要であると考えられる。これを通して、多言語併用社会における文化変化の分析視点を示していく。

本研究の目的は、言語の世代間継承の実態を通して、文化変化の実際を文化の内側から描き出すことにある。研究目的の達成のために、4年間の研究期間を3つの段階に分けて進めた。第1段階は、既に文字化して採録している言語データのうち基礎語彙 2000 語を内容により再分類し、語群に編成した。第2段階では、話者の年齢差、地域性などによりタイタ語にどのような認識上の違いがあるかを、世代間継承の視点から記録した。第3段階では、記録したデータの分析をネイティブ・スピーカーとおこない、研究全体をまとめていった。語彙認識に関するネイティブ・スピーカーとの分析と再チェックは現地においておこない、データ整理とまとめは国内でおこなった。

こうした、これまでに収録したタイタ語の基礎語彙およびタイタ語の文法を基礎データとして活用しながら、研究を補完するもの

として、次の2つのタイタ語の言語データを利用した。すなわち、*Chuo cha Mashomo ga Imbiri*、および *Taita na Kanisa la Kristo katika Miaka Hamsini 1900-1950* である。前者は、1965 年までタイタ地域の小学校で使用されていたタイタ語のテキストであり、後者は、CMS がタイタでのキリスト教布教活動 50 年の歩みを振り返ったものである。次に、新規収録データとして、伝統語彙の記録とその分析を世代と意味領域の 2 つの視点からおこなった。これまでの研究で伝統語彙のうち年齢差、地域性による違いが明らかになっている語群があり、それを A 群（身体部位、自然現象などの日常的語彙）、B 群（儀礼、説話などの世界観にかかわる語彙）の 2 つに分け、実際の使用例を記録し、伝統語彙にどのような構造的な変化が生じているかを分析していった。これにより、「年少者が年長者の知っている伝統的な語彙のごく一部しか理解しなくなったり、年長者は伝統語彙に取って代わる借用語彙を理解せず、それに反感をいだいたりする」（Crystal, D., *Language Death*. Cambridge University Press, 2000、斎藤兆史他訳『消滅する言語』中央公論新社、2004 年、p32）実態をタイタ語において明らかにしていくことを試みた。

4. 研究成果

アフリカ社会の近代化や文化変化が語られる時、外部からのインパクトによる変化が強調されることが多いが、表現手段としての言語にあっては、内部要因が言語選択に大きな影響を与えている。

平成 23 年度は、これまでの研究のなかで既に収録している言語データを内容により再分類し、語群に編成した。平成 24 年度では、既収録語彙の分類方法を大幅に見直すとともに、収録言語データの再分類と修正をおこなった。平成 25 年度では、収録語彙を対象にユネスコの分類基準に則した言語の世

代間継承の測定を試みた。これをもとに、平成 26 年度では、タイタ語の変化に関する認識をもとに、収録語彙 2000 語の分類を完了した。すなわち、「スワヒリ語をはじめとする他言語の語彙を起源とするもの」、「各世代を通してタイタ固有の語彙として使われているもの」、「年長者をはじめとする一部のタイタ人により使用されているが、将来世代間継承が絶たれる可能性がきわめて大きいもの」、以上 3 分類である。これにより、一つの表現内容に関して分類の異なる複数の語彙があげられる例が 2 割ほどあることが明らかになった。この部分は、従来の表現型が新たな表現型へと置き換わっていく変化型として捉えることができる。

こうした研究成果に関する詳細な分析は、平成 27 年 2 月～3 月にかけて行った現地調査のデータを加えて公表していく。また、タイタ語のコーパスと世代間継承の研究成果を加味して、タイタ語辞典の改訂版を公表していく予定である。危機言語はその言語自体の消滅を問題にしているが、そこに至るプロセスを考えた場合、話者数 15 万人ほどの言語であるタイタ語内部での文化変化と民族語に対する維持のための活動は、危機言語研究に対し、従来型のフィールドワークとは異なる視点を与えてくれると考えられる。この点は、今後の継続研究としていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1 件)

坂本 邦彦 他、ミネルヴァ書房、現代の国際政治、2014、430 (344-368)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 邦彦 (SAKAMOTO, Kunihiko)
尚美学園大学・総合政策学部・教授
研究者番号：20215643

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：